

# エンカウンター (ENCOUNTER)

## 第 24 号

平成 16 年 4 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

### 矢内原忠雄全集第 17 巻より(3)

#### わが牧者

エホバはわが牧者なり、われ乏しきことあらし。(詩篇 23 の 1)

早春の某日早朝、まだほのくらき頃、わが長男の南方最前線に出で征くを自由ヶ丘駅のプラットフォームに見送った。彼は海軍予備少尉である。始発電車は轟然として入り来たり、彼は去った。死別を欲せず生還を期せず、余は足早に睦坂を上ってわが家に帰った。「エホバはわが牧者なり、われ乏しきことあらし、」と言う詩篇第 23 篇が余の口にあった。

彼の生まれたとき「伊作」と名付けた余の信仰の、実地に試みられる日が来たのである。南海の島はわれらのモリヤである。ただ願ふところは彼が常に神を信じ、神の守りの中にありて、職務に忠ならんことである。祈る、昼は日汝を打たず、夜は月汝を射たざらんことを。汝死の蔭を歩むとも禍害を恐るるなかれ。エホバ汝と偕に在し給へばなり。

#### 聖書暗誦の必要

エホバの法はまたくして靈魂をいきかへらしめ、エホバの証詞はかたくして愚なる者を智からしむ。(詩篇 19 の 7)

聖書を学ばずして信仰を求むるは、釣針を用ひずして魚を釣らんとするに等しい。その釣り上げたと思ふ信仰は藁屑（わらくず）の如く、風吹けば消えて跡形もないであろう。

聖書はただ読むのみでなく暗誦して置くことがよい。勿論聖書全部を暗誦することは不可能であるが、処々愛読の箇所を暗記すれば、事に当たりての力となる。

戦場に於いて、病床に於いて、留置場の中に於いて、平生暗誦している聖書の言を食うて生き、之を現実の力として身を支へたことは、我らの兄弟たちの報告する実験である。各自おのれの為に準備せよ。

## 休 息

凡て勞するもの・重荷を負うもの、われに來れ。われ汝らを休ません。我は柔和にして心卑しければ、我がくびきを負いて我に學べ。さらば靈魂に休息を得ん。わがくびきは易く、我が荷は輕ければなり。(マタイ伝 11 の 28-30)

人々は疲れている。身体も疲れ、心も疲れ、靈魂までも疲れ果てようとしながら、生活のために奔命している世の人々の姿は、見るに痛ましくある。

休息は必要である。併しこの時局下、休息する余裕があらうか。はたまた何によって休息が与えられるであらうか。国民歌謡か、あらず。慰安大会か、あらず。之らはただ神経を興奮せしめ、疲労素を攪拌するのみ。

然るにここに一人の人が立って、「我に來れ」、「我に學べ」と言ひ給ふ。まことイエスの御言を聞き、イエスの生き方に学ぶとき、我らは靈魂に眞実の休息を与へられる。靈魂に休みを得れば心の思煩ひから解放せられ、心の思煩ひから解放されれば身体の疲れも癒される。よしや肉体は世の重荷に堪へかねて倒れても、靈魂は歌うたいひつつ天翔(あまがけ)ることが出来るのである。

## 静かなれ

汝ら立かへりて静かにせば救いを得、平穩にして依頼まば力を得べし。(イザヤ書 30 の 15)

右は予の特愛の聖句であり、この際我が国民に対(むか)って繰返しこの言を告ぐる必要を感じずる。

戦争の終了は国民生活の全般に亘りて急激なる変化をもたらすであらう。神を信ぜざる者は憂ふべき時に憂れひず、虚しき樂觀に耽りて今日の事態を導き出したと共に、事ここに到れば不安の妄想に駆られて心動揺し、前途に対する希望を喪失せんとする。神を信ずるものは然らず。己に依り恃(たの)まざるが故に、焦燥もなく不安もない。大能の神に静かに依り頼む心には、神よりの救と力とが臨み、己の将来にも国の前途にも光と望とを見出すのである。

## 聖書を学べ

聖書によらない基督教は神の知恵ではなく、人間の教えであるに過ぎない。それは多少の物知りと、多少の社交と、多少の物質的利益と、多少の宗教臭とを人に与へるだけであって、永遠の生命に到るたましひの新生を賦与する力はない。根なき草の如く、生え出でて忽ち枯れる信仰である。そのやうな人間的基督教は、学ぶに価値なく、教へるは害毒である。

世間の人気が衰へ、かへって迫害が臨んでも信仰の純潔を維持する如きキリスト教は、ただ聖書によつてのみ学ぶことが出来る。而してそのやうな基督教のみが、個人と国とを根本的に革新することが出来るのである。

## 聖書を学ぶ方法

聖書を学ぶ方法は、何よりも第一に、聖書をよく読むことである。敬虔なる心を持って聖書を読み。理解しがたき事があってもそこに停滞せず、自分に解るところだけを摂取して靈魂の栄養とせよ。然るとき我ら自身の人生の経験と信仰の進歩とに依じて、読む度毎に新しき真理が啓示せられる。聖書は誰にでも解る書であって、而も誰にも解ってしまふことのなき書である。それが聖書の真理の書たる所以である。

第二に、聖書を学ぶには善き教師につき、善き書物を読むことが有益である。但し手当たり次第に信仰書類を乱読することはよくない。聖書を学ぶのは単なる知識の吸収でなく、信仰を養ふことであるから、善き書物を選択して深く読むことが必要である。自分の就いて学ぶ教師に対する信頼と、書物に対する純潔の態度となくして、力ある信仰を学ぶことは出来ない。

第三に、聖書を学ぶためには人生の実験場に於いて之を実習しなければならない。実習によって学んだ信仰だけが、本当に自分の実力となるのである。学校の勉強は病気休学すればそれだけ遅れるが、信仰の勉強はすべての境遇において天与の実習上を見出す。実習項目の重要な一つは、自己の学んだ信仰の喜悦を他人に伝えることである。自分の身近の人々と共に聖書を学ぶこと、その人々に聖書の真理を伝える事は、自分自身にとりて何よりの学習である。

日本再建のために絶対に必要なるものは聖書による基督教信仰の普及である。収穫物は多く、労働者は少ない。神は『嘉信』(注)読者の心の戸を叩いて、聖書による信仰を学ぶことと、自己の学んだ聖書の教えを国民に伝えることとを求め給う。

(注)『嘉信』 矢内原先生の月刊の基督教個人伝道誌。昭和7年11月(39歳のとき。)(昭和7年から12年までは『通信』という題)から昭和36年12月亡くなられる時(68歳)まで発行。

## 一日と永遠

イエスは「一日の苦勞は一日にて足れり」と言い給い、パウロは「我日々に死す」と言った。我らは毎日を最後と思ひ、いつ召されても悔いなき信仰生活を送らねばならない。

併しこの事は決して我らの生活に、焦燥と不安をもち込むものではない。我らは永遠に生きる者として、常に余裕ある心を以て過ごすことが出来る。そは我らの一日は永遠の中にあり、また一日の中に永遠があるからである。

永遠に生きる者の生涯は、怠ることなく、急ぐこともない。勇敢に戦ひ、平安に憩ひて、臆することなく、窮することもない。夜は疲れても朝には力を新にせられ、土曜日には傷ついても日曜日にはよみがへる。ああ楽しいかな、イエスを信ずる者の生涯。それは永遠に生きる者の、屈託するところなき歡喜と希望の生涯である。

## 伝道の勇気

我らはキリストの福音を聞いて救はれたものである。もと弱き者であったが今は強くせられ、もと泣く者であったが今は喜ぶ者とせられ、もと希望なき者であったが今は希望に生きる者とせられた。これは事実である。科学も哲学も、火も水も、迫害も嘲笑も、この事実を否定することは出来ない。事実より強いものはない。我らはこの事実に基き、全世界を向ふに廻して、キリストの福音の真理であることを証言する。非科学的等の世評に恐れて、福音の証明に率直さを失ってはならないのである。



10月1日

「目もはゆるコスモス、菊、ダリヤ」と藤井武の歌った秋が来た。

「私を記念する人はこの日に於いてせられんことを」と、彼の書きのこした10月1日が来た。

彼は今天にてコスモス咲く園に歌うたふ。

我らは地にて呻吟の日を送る。

藤井武よ、来りて我らを助けよ、我らの心を汝の居る天に向けしめよ。

汝が地にありし日の生活のごとく、我らの思ひをば世に対して死なしめ、天に生くるものたらしめよ。

我らの立場をば来世に置かしめよ。そこにのみ現世を正しく生きる力は湧くのである。